

## 人生を拓いてくれた「珠玉の言葉」1967年

### 1967.3.14 歎異抄入門より

- ・ 念仏を生きて、この世の浄土へ行こうではないか。そこで真実に生き、平安に生き、仏知にそうて精いっぱい生きようではないか。
- ・ 人間は一人で生まれ、一人生き、一人で死んで行く。一人で信仰体験するのも、同じ運命である。
- ・ 孤独は地上にいる限り、人間の運命である。それが救われるのは如来のふところに帰るときのみである。
- ・ 自然、すなわち如来に反した行動は、すなわち真理、知恵、に反した行動である
- ・ はからい無しに、すなおに生きる事は、最高に生きる事であり、安心しきって生きる事である。
- ・ どうせ浅知恵の人間、おれがおのれが自力のはからいで生き、事を成そうとしてもうまくいくはずが無い。つまづく、つまづけば必ず悪いのは他人だ、社会だと考えて怒り、恨み、復讐する。それで心が晴れるのかと言うと、心はみじめになり、毒され、荒れるだけだ。幸福は何処にも無い。
- ・ 私達は、人間の幸福は、他人との比較から得られる様に考えて来た。自分が10の財産や名誉を持ち、他人が5の財産や名誉しか持たない場合、私達は比較からして優越を感じ、自分が幸福だと考える。そういう所から我々は知らず知らずのうちに他人の不幸を願う様にさえなりがちである。
- ・ 私が死んだら、加茂川に捨てて魚に食べさせよ！

### 1967.10.1

- ・ 読書のあとにも一種の怠惰な時間が必要
- ・ 心を洗う習慣
- ・ 人間のさまざまな表現の中で、一番むつかしくてしかも一番美しいのは微笑であろう。

### 1967.10.5 青春論より

- ・ 批評は個人を傷つける事を目的にするものではない。相手をおとし入れるのではなく、提出された問題をいかに解決するか・・・と言う気持ちより出なければならない。
- ・ 政治は国民に奉仕する技術である。支配する為の術策ではない
- ・ 無条件降伏した国民
- ・ 軽々しく侵略戦争への倫理的戒めを変更していいのか

1967.10.5 亀井勝一郎「青春をどう生きるか」より

- ・ 大抵の人は自分を不幸と思っている
- ・ 若い人の幸福は熟練者に邂逅する事
- ・ 青春時代に、たとえ一句でもすぐれた言葉に接して心をふるい立たせる様な事があつたならば、その時を幸福とみていい。
- ・ 幸福論とは精神の一種の贅沢のように思われる
- ・ 人は現在を生きずに、未来を生きようとする。そして、日々の現実に愚痴をこぼしがちだ。

1967.11.8 末川博「生きるということ」より

- ・ 日々是好日
- ・ 大きな声で堂々という
- ・ 人生三分論（寝、働、食事とか雑事）
- ・ 人間の生涯も三つに分けて生きる事が出来たならみんなが幸福だと思う
- ・ 一人はみんなの為に、みんなは一人の為に
- ・ 日本人はいいと思うことでもそれをやる勇気が無い
- ・ どんな小さな事でも、いいと思った事はやれ
- ・ シンプルライフ
- ・ 人の短をいうなく、己の長を説くなし
- ・ 理想は高く、姿勢は低く
- ・ 役にたたぬ本を読む
- ・ マルクス読まずのマルクス知り
- ・ 学問の理念は、ほんとうの事を知ろうとする事、すなわち真理の探究である

1967.11.20 歎異抄入門より

- ・ 四諦
  - 一 苦諦
  - 二 我執
  - 三 一、二より人間が解放されれば苦は消滅し人生の姿は一変する。
  - 四 解放する為の正しい方法
    - 正見、正思惟、正語、正業、正命、正精神、正念、正定（八正道）
- ・ 人が毒のついた矢で苦しんでいる時は、その矢をぬきとることだけがしなければならない事で、矢が飛んで来た方向など無意味だ。
- ・ 色（物）は匂へど散りぬるを（緒法無我）、わが世誰ぞならむ、有為（まよい）の奥山今越えて浅き夢みじ酔いもせず（涅槃寂靜）

- ・ 救いは気づく事である
- ・ 不合理なる故に我信ず
- ・ 人間は生きている権利があって生きるのではなく、許されて生きているのだ。
- ・ なまじっか若い時に宗教などさと顔をしなが良い。しかし、その正しいものを求める気持ちが純であり真実なら、いつかその求める果に「うしろを見る目」が開ける時が来る。
- ・ 南無阿弥陀仏（インドの古い言葉）  
ナム・・・帰依する      アミダ・・・はかりしれない      ブツ・・・悟りを開いたもの  
その仏に絶対的な信頼を置いて帰依する。